第 56 回埼玉文芸賞（贈呈式部門別選評）

※「 」は生原稿・雑誌掲載作品、『 』は単行本

【小説・戯曲部門】

今回の小説・戯曲部門の応募総数は 77 編であった。選考に当たって期待する基準は、独自な発想で清新な物語が成立しているか、文章の運びに小説的な魅力を伝える表現力が維持されているか、という点である。今回も、傑作との出会いを楽しみに選考に臨んだのであるが、委員一同、慎重に審議をつくした結果、残念ながら埼玉文芸賞に値する作品はなかった。しかしながら、準賞１として山川草也「呆禅」、準賞２として長谷川未帆「てのひらをかえす」、佳作として川原和三「辻屋の長者」を得たことは幸いであった。

山川草也「呆禅」は、会社を定年退職した男が、妻の病死の後、独居生活をへて出家得度し、秩父の寺の住職になるまでの話である。感情の行き違いのあった亡妻や、百貨店の会社人生での左遷を招いた失態などの回想をはさみ、軽快に話は進む。僧侶になる奇縁を作った川越の住職をはじめとする人物たちとの交流も感傷を排したクールかつ諧謔をおびた語りで、テンポよく運ばれる。ただし、文章が修辞的魅力に欠け、また雑なところが見受けられ、さらに人物造形がいかにもありふれた通俗的な設定で処理したところも目立ち、その点が惜しまれる。

長谷川未帆「てのひらをかえす」は、プロ野球のドラフト会議で選ばれた選手の明暗を描くという、その素材が新鮮で、話の運びも才筆を感じさせ、魅力的な表現も多々あった。しかし、選手の自意識の過剰ぶりが、それこそ度を越して過剰で、作品魅力を削いでいた。何よりもスポーツを題材にしていながら、作品に身体性が欠けていたことは課題であろう。

川原和三「辻屋の長者」は、ミッションを託された行者の隠密の動きを描く時代小説。作者は三回連続で最終候補に残り、筆力は確かな書き手であるが、今回も話の芯になるところで説得力に欠け、また文章にも少なからず綻びを残していることは、力量のある人だけに残念であった。

（中村　邦生）

【文芸評論・エッセイ・伝記部門】

今回こそ埼玉文芸賞を出したいと選考に臨んだが、願いかなわず残念。準賞２作を紹介する。

梅宮創造『声』は大学院生時代の出来事を語ったエッセイ。指導教授の小沼丹に連れられて井伏鱒二宅を訪ねたところ、文芸誌「海」編集長の塙嘉彦が先客でいたという。何とも羨

むべき顔ぶれである。今や名うてのエッセイスト梅宮氏の未だ初々しい当時の話である。単行本『千無のまなび　小沼丹氏にふれて』所収の巻頭作である。この書名と同題の章も併せ二部構成の作品として応募しなかったのはなぜだろうか。巻頭作『声』12 枚（原稿用紙換算）で小沼丹との出会いを語る初々しい視点の活用は、後続する章に認められる筆者一流の観察力と洞察力を制御してしまった憾みがのこる。しかし、この文章を読むのはとても心地いいものだった。さすが小沼丹ゆずりの文章家という気がした。

自伝エッセイ「強いられた人生を生きて」の佐藤咲子は、岩手の山峡の村で両親を殺害され、年少の犯罪被害者遺族として「強いられた人生」を生きてきたという。猟銃による強盗殺人の事件当時、筆者は高１、兄が高３で、未成年の被害者遺族の後見制度などなかった時代である。筆者はヨハネの「あなたを孤児にしない」という言葉に支えられたという。今は狭山市に住み、自らの体験を語る講演および社会活動を通して多くの「助力者」を得た。社会的評価も得ている。ノンフィクション・ノベルと称したトルーマン・カポーティ『冷血』が取材した殺人事件や、佐木隆三『復讐するは我にあり』が取材した西口彰連続殺人事件が起こった頃と、同時代の事件だった。カポーティも佐木も犯罪者について語ったが、本応募作は犯罪被害者遺族が語った類稀な作品である。ちなみに佐木のタイトルはパウロがのこした言葉である。ヨハネの言葉もパウロの言葉もその主格は「神」である。近代の「法」の下にあってもぎりぎりの局面で人は「神」を意識するのかもしれない。

外に佳作５編を選出。永野雅也「父の三行日記」、わださとる「曼珠沙華」、後藤よしみ「高柳重信の一行空白の行方」、美濃部秀子「百年を生きる」、クルシン京人「日々変化する価値観」。後藤氏の作品が文芸評論、他はエッセイである。

（佐藤　健一）

【児童文学部門】

応募作品数は 33 編。ここ数年作品全体のレベルが上がり、今年もいくつもの力作、意欲作に出会えた。特に、上位の三作品の順位には、大いに悩ませていただいた。最終的には、「この作品だけは落とせない！」という思いにより、判断の針を傾けた。

準賞１席は、山根三穂氏「ふたごのミルとルミ」。バラまつりでのペンギンとの出会いに意表をつかれ、その顛末にほっこり。透明感のある明るさが不思議に魅力的。このセンスは天性のものかもしれない。読者対象は小学校低学年で、高学年以上対象の応募作が多いなか、貴重な存在である。

準賞２席は、せやざきやすこ氏「おばあちゃんちの座敷わらし」。丁寧に心配りして書かれ、好感が持てる。母娘三代がそれぞれ胸に秘めていた母への思いは、共感を呼ぶだろう。文章の流れもよく、たいへんまとまりのいい作品。

佳作１席、川田八重子氏「ヒマラヤの少女ミラ」。ヒマラヤの寒村で暮らすミラの一家を、

母の病気や貧困が襲う。暮らしぶりや風景の描写がリアルで、人物像にも血が通っている。

佳作２席、米熱氏「きらわれもの賛歌」（詩）。嫌われている虫や言葉に思いを馳せ詩にした、好作品。思わずニヤリとさせられた。

佳作３席、金子みよこ氏「とおかんやのお月さま」。農村の子どもたちの伝統行事を描く作品で、しみじみとした味わいが印象深い。

佳作４席、和子透氏「海が父ちゃん」。漁で父を亡くした少年の暮らしと思いがよく描かれている。少年の成長が、波音を背に心地よい。

佳作５席、秋沢楓氏「紙のやりとり」。ＳＮＳ全盛時代に、あえて文通を続けるサッカー少年とサッカー少女の瑞々しい思いを描く。時代に逆行する若い二人にキュンとなった。

佳作６席、早瑚みなお氏「彼岸花の根」。たぬきときつねによる童話ではあるが、語られる内容はずしりと重い。

（金治　直美）

【詩部門】

詩部門の応募数は 52 点。そのうち詩集は５冊であった。委員はそれぞれ、総てを予め読みこんでから選考に臨んだ。初めに全体を見渡した上で委員それぞれが意中の候補を挙げた。議論を重ねたのち最終的に、文芸賞を原島里枝氏の『常夜灯』に授与することを決定した。

原島里枝氏の『常夜灯』は、「私」の視点から出発して多彩なイメージを重ね、世界を幻想として再構成する。その視野は宇宙の広がりに及ぶ、というより、宇宙をも私の内にひきよせ、私が世界そのものと化すという点で、強いインパクトを与えた。全体で三部分を為す。第一部（α）は、所々言葉が生硬に傾くが、意欲的に自らの手法を貫いていく姿勢が評価された。第二部（β）の「古書を開く」や「感電」、第三部（γ）の「水紋」は、私の外なる他者の存在を窺わせ、真情が吐露される点が好感を抱かせた。

佳作として第一に挙げたのは玄原冬子氏の『福音』。この詩集は、埼玉文芸賞候補として最後まで競った。作者の生きる世界を彷彿させる完成度の高い言葉。身近な人々への思いの深さを綴る豊かな抒情表現において優れていた。橋本俊幸氏の『青空に星は見えない』は的確な言葉で詩行を連ね、社会や自然の事物との関係を描きつつ氏の人格を窺わせる。その誠実な筆致が評価された。ゐしもりみづゑ氏の『淼』は、語呂合わせや言葉遊びの徹底と巧みさにおいて、初めは異色の印象を与えたが、巻末にゆくほど氏の精神の在処を、またその深まりを窺わせた。

以上３冊の詩集のほかに、原稿による応募から３点を佳作とした。松井ひろか氏の「半夏生」は、人間関係の痛みや屈折を巧みに表現して訴えは強い。野澤舞花氏の「日々から生まれたことば」は、私と他者（人・世界）の触れ合う皮膚感覚を巧みに表現している。作者は若いが、すでに表現への志向が確かである。大槻えく子氏の「赤い自我像」は、素朴だが、

重ねてきた経験に対して誠実に言葉を紡いでいる。

高校二年生の樋口綾花氏による「口を縫って脳で言う」を奨励賞とした。小気味良く繰り出される言葉に将来性を感じた。

（川中子　義勝）

【短歌部門】

応募総数 70 点、最高齢 92 歳、高校生の応募も３点あり、幅広い作品が集まった。

残念ながら埼玉文芸賞はなく、準賞は丸地卓也氏の『フイルム』と斎藤千代氏の『月曜バッグ』に決定した。

丸地卓也氏は医療ソーシャルワーカー。嘱目としては日常を詠っているのだが、視点が独特で、どきりとさせられる新鮮さがある。社会に対する視点が鋭く、現代という時代の持っている不可思議・不合理が鋭い刃物で切り取ったような断面を見せる。

内視鏡下手術用ロボットダ・ヴィンチはかしかし歩き出すかもしれぬ
所得格差はジェンガの塔のごとくして一番下のピースを抜くか
バンクシーの絵の落札で起動する裁断機こそかなしき玩具
黒霧に浮かんだ氷はピシという北極の裔とうそぶきながら
からだじゅう常在菌のいることが楽しくわたしは一人の大地

斎藤千代氏は小学校の講師。月曜バッグとは小学生が体操着や上履きなどを持って行く時の軽くて大きいバッグのこと。小学校の生活、子どもたちとの交わりが柔らかいタッチで描かれている。コロナの時期を含み、通常ではない状況が歌集の変化にもなっている。

担任の悪口を平気で言える場所　図工室には守秘義務がある
もうひとつの選ばなかった方の人生を密かに恋うる夕暮れの杜
九〇年代が懐メロだなんて　徳永英明の「壊れかけのＲａｄｉｏ」
四四二年振りの皆既月蝕　次は三二二年後
優しい雨のような人だった　降り出したことさえ気づかないまま

奨励賞は野澤美羽の「ドラマチックに」。

佳作は加藤健司『方程式じゃ愛は解けない』福田望「ばらばらになる」山名聡美「ビール色の石」平井守「未知なる時間」大野博司「補うべき光」鈴木潤也「ソウルメイト」。

（沖　ななも）

【俳句部門】

応募作品数は昨年より６編減り 89 編。内訳は単行本８編、原稿等 81 編。応募者の年齢は

10代から90代と幅広い。ここ何年かで30代、40代の応募が増えたのは喜ばしいことである。候補作品20編を10編にしぼり慎重に吟味したが、今回は力量が拮抗していて残念であるが埼玉文芸賞を選出できなかった。来年に期待したい。

《準　賞》田口　　武『煙 草』　　金魚から青空は見えるだろうか
水鳥を見つつもう一本煙草

金魚玉をながめていると金魚も人間や自然を見ているのでは、発想の展開が面白い。煙草の題名から作者の自画像。取合せが絶妙。

《準　賞》山下由理子『風の楯』　　踝のふたつに夏の来たりけり
神鶏の片足浮かす余寒かな

ふたつの踝に夏の来たことをはっきり感じた爽快な作。余寒へ戸惑う鶏の足が巧みである。日常をしなやかに表現している。

《奨励賞》齊藤　　栞「今日の月」　　カーディガン畳みて軽し鳥の恋
屋上は柵に囲まれ雲の峰

畳まれたカーディガン、鳥は恋の季節である。春があふれている。殺風景な屋上に立つ雲の峰、現代的な構図が新鮮である。

〔佳作〕木村佑「ヒト目ヒト科」　　星とんで後ろの星のとびたさう

流星は一瞬の光だけだがその後の星に思いを馳せる感性に惹かれた。

〔佳作〕髙橋邦夫『素心』　　空よりも深き空置き田植水

植えたばかりの田水に映る空。光が見え調べもよく実在感が確かである。

〔佳作〕山田桂『山匂ふ』　　外階段まで山霧の来てをりぬ

狭霧のうちは美しいが、濃霧が外階段へ迫り作者の緊張感が伝わる。

〔佳作〕山﨑加津子『時の水辺に』　　おとなりの家がなくなるさくら草

隣家が突然更地になる日常の中の非日常性。季語が鮮やか。

〔佳作〕くらしげりな「教室」　　夏草やグローブ持ちて駆け出して

グローブを持って一斉に駆け出す少年。見守る眼差しが温かい。

〔佳作〕坂西涼太「付箋跡」　　嬰児といふ大汗を抱きけり

嬰児は全身で汗びっしょりになって泣く。若い父親の初初しい感動。

（田口　紅子）

【川柳部門】

本年度も残念ながら「埼玉文芸賞」の該当者はいませんでした。

応募者は昨年よりも12名多い52名でした。

準賞一席に「思いの丈」島田まさえさん「口に出す魔法の言葉ありがとう」「聞く耳を忘れてきたか頑固者」日常生活の人間をさり気なく見つめる中にも、風刺をこめた表現が秀逸でした。

準賞二席は「老いの茫々」柳沢旭日さん「無駄ごとの最たる戦さ止まぬ業」「戯けてる人の驕りと咎の業」いつ終わるとも知れぬ戦に、神をも恐れぬ人間の傲慢さに、業を煮やした作品であり、戦争に対して警鐘を与える句となりました。

佳作一席は常連の鎌倉八郎さんで、ベテランらしく洗練された句作りでした。佳作二席は木村公平さんで米寿を過ぎた心境を、嘆きながらも日々を楽しんでいる様子がうかがえました。佳作三席はゆみさんで、どの句からも快活な笑いが聞こえてくるようで、その人柄が滲んでいて共感を覚えました。佳作四席は佐藤京子さんで三年連続です。人生を淡々と詠んで老後を恙無く生きているのが、伝わってきました。佳作五席は榎本祐子さんで祖父母、恩師、孫との想いを綴ったほのぼの感が優れていました。佳作六席は藤井いろりさんで花を愛でる心優しさ、自然に対する畏怖の念を抱いた点が秀でていました。

（西松　忠義）

《第 56 回埼玉文芸賞選考委員》

小説・戯曲部門	相澤　与剛	中村　邦生	山名美和子
文芸評論・エッセイ・伝記部門	加藤有希子	佐藤　健一	杉浦　　晋
児童文学部門	金治　直美	櫻沢恵美子	森埜こみち
詩部門	川中子義勝	北岡　淳子	野村喜和夫
短歌部門	沖　ななも	外塚　　喬	内藤　　明
俳句部門	尾堤　輝義	久下　晴美	田口　紅子
川柳部門	酒井　青二	相良　敬泉	西松　忠義

《事務局より》

第 56 回埼玉文芸賞贈呈式につきましては、3 月 15 日（土）桶川市民ホール 1 階　プチホール（さいたま文学館併設）にて開催いたします。例年、贈呈式内で発表されていた選考委員による部門別選評につきましては、さいたま文学館ＨＰおよび書面にてお届けいたします。